

科目名	日本文化論特講 I	担当者	ノグチ ケイコ 野口 恵子	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>古代の日本文学作品を取り上げる。日本の古代には、人々が共有していたルールが存在していた。21世紀の我々からすれば、つい我々の常識を当てはめてしまおうとするが、それでは古代の人びとの思考を理解することはできない。作品を読む際も同様で、古代の人々の共同性を想定する必要がある。この点を踏まえた上で、文学の生成と展開の様相はどのようなものなのかを考え、その時代の文化的特徴を捉える。また、資料の扱い方、分析の方法といった研究手法も身につける。</p>		
到達目標	<p>古代の人々は、自らを取り巻く状況をどのように捉えていたのかを理解したい。こうした営みの継続は、現代社会における異文化に対する理解へと繋げることが可能である。すなわち、研究しながら、生きる力を身に付けられるのである。</p> <p>加えて、修士論文の執筆時に必要となる研究手法を、基本教材から体得したい。</p>		
学修方法	<p>まずは基本教材を精読し、各章ごと内容をまとめる。それから課題に取り組んでほしい。理解が深まらない時は、参考図書を精読する。それでも十分ではなければ担当教員に質問すること。</p> <p>なお、レポートを作成する際は、論の展開が分かる計画書（箇条書き可）を担当教員に提出してから、執筆を始めること。</p>		
スケジュール	<p>前期：教材1のレポート課題（1）→2017年7月中旬まで</p> <p>教材1のレポート課題（2）→2017年9月中旬まで</p> <p>後期：教材2のレポート課題（1）→2017年11月中旬まで</p> <p>教材2のレポート課題（2）→2018年1月の課題提出締切日まで</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	課題にきちんと答えられているか、またレポートの体裁、例えば起承転結の構成になっているか評価する。
	平常評価	20%	提出物の有無やメール、manabaでの活用度を評価する。
履修者への要望	<p>基本教材に書かれている専門用語等、理解できない内容が見つかった場合は、すぐに教員に質問せず自分で調べて欲しい。自分で調べて理解した方が、身につきやすいからだ。もちろん、辞書などに説明がない内容もある。その場合は教員が指導する。</p> <p>また、1度の精読で内容がまとめられなかった場合、そこであきらめずに、何度も読み返してみよう。私自身も何度も読み返している。論文の読解・執筆は、繰り返し行うほど学習効果が高い。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 古橋信孝 教材名： 『文学はなぜ必要か 日本文学&ミステリー案内』 (笠間書院, 2015年) ISBN:978-4-305-70784-0 2,400円+税
	なぜ文学が人間に必要なのかを考えている一書。同時に、言葉とはどういうものかという問いに向き合いながら、文学の面白さ、その時代にはどのような問題を孕んでいたのかなどにも触れている。そのような考えの中から、日本語の文学の流れにまで言及している。
参考図書	古橋信孝『神話・物語の文芸史』(ペリかん社, 1992年), 『日本文芸史』【全8巻】(河出書房新社・1986~2005年) など
履修上のポイント	各時代を代表する文学作品を取り挙げている。それぞれの時代がどういう時代だったのか、また時代によって文学の性質が異っていることにも留意してほしい。加えて、なぜその文学がその時代に要求されたのかについても考えて欲しい。なお、この教材は、著者がすでに論文で書いた内容を踏まえて書いている箇所が多々あるので、必要に応じて著者の論文も読む方が望ましい。
レポート課題 1	第1章から第6章までの中から一つの章を取り上げ、そこで議論されている問題点について説明した上で、あなたの考えを述べなさい。(2,000字以上) 留意点 : 各章のタイトルは疑問形式で付けられている。その問いに対して、筆者はどのように結論を導いているのか、またあなたはその結論に対してどのような考えをもっているのかを述べること。
レポート課題 2	第7章から第12章までの中から一つの章を取り上げ、そこで議論されている問題点について説明した上で、あなたの考えを述べなさい。(2,000字以上) 留意点 : 各章のタイトルは疑問形式で付けられている。その問いに対して、筆者はどのように結論を導いているのか、またあなたはその結論に対してどのような考えをもっているのかを述べること。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 梶川信行 教材名： 『額田王―熟田津に船乗りせむと一』 (ミネルヴァ書房, 2009年) ISBN:978-4-623-05598-2 3,000円+税
	『万葉集』の女流歌人として名高い額田王は、生身の実態を持った存在ではない。本書では、七世紀に実在した皇裔の一人で、『万葉集』に「額田王」として名を残した女性を捉えようとしている。そして、そのような彼女の動きの中で、いかに作品が生まれたのかを考えている一書である。
参考図書	梶川信行『創られた万葉の歌人 額田王』(はなわ書房, 2000年), 多田一臣『額田王論―万葉論集一』(若草書房, 2001年) など
履修上のポイント	『万葉集』に「額田王」として名を残した女性と、『日本書紀』に「額田姫王」として名を残した女性とは同一人物である。しかし、文学作品と歴史書という編纂目的が異なる書物では、同一人物であっても扱い方が異なっている。その違いに留意すること。また、本書から、資料の扱い方や資料の分析方法などの研究手法を学んでほしい。
レポート課題 1	「宮廷歌人」として、額田王はどのような役割を担っていたのかを、具体例を挙げながら説明しなさい。(2,000字以上) 留意点 : 「宮廷歌人」は、古代の官僚制度の中に存在しない呼称である。そのような呼称で額田王を捉えることによってどのような問題を孕んでいるのかについても留意してほしい。
レポート課題 2	天智挽歌群と持統朝の作品における額田王の作歌状況は、それまでの作品とは異なる。両者を比べてどのように変化しているのか、それぞれ説明しなさい。(2,000字以上) 留意点 : 天智天皇の死後、作歌状況において明らかな違いが見られる。例えば、天武天皇の時代の作品が一首も残されていないなど。そのような違いを見逃さないでほしい。